

埼玉県指定無形民俗文化財

大瀬の獅子舞



祭礼

七月四日(土)・五日(日)

午前十時頃～午後八時頃

祈禱獅子

七月二十六日(日)

午前七時頃～

場所

祭礼 大瀬浅間神社・氷川神社

つくばエクスプレス八潮駅南口バス乗り場

「松05」又は「金61」から「潮止橋南」下車すぐ

祈禱獅子 宝光寺—上大瀬地区

—下大瀬地区—大瀬氷川神社

大瀬の獅子舞の由来

“ドロンコ祭り”とも称される大瀬の獅子舞は、一六六二年(寛文二年)頃、当時この地を治めていた旗本・森川氏から獅子頭を拝領されて始まったと伝えられ、江戸時代から今日まで三百数十年の歴史をもっています。

獅子舞は、江戸時代に盛んであった富士・浅間信仰(富士講)と深く結びつき、したがって舞の形態も三匹の親子獅子が富士山に登る途中のできごとを物語風に描いています。大獅子は兄獅子で、顔が青く、眉が金色で目を割(は)き出し精悍な面魂をしています。中獅子は弟獅子で、顔が黒く、眉が金色で目は黒く、齒は銀色で幾分口を開けきみます。ともに、鼻の両側には白髭をたくわえ、一尺二、三寸ほどの角が生えています。女獅子は角がなく、顔は金色で、大獅子、中獅子と比べて優しい顔つきは母親獅子そのものです。

舞いの構成は序の舞い、本舞い、結びの舞いに分けられ、笛は雛子笛を用いてその種類は十七とおりあります。とりわけ、本舞いにおける豪壮な、ときには情緒豊かな哀調こめた笛の音は神社境内をうめる観客を魅了させます。

ここでは、伝承される十二とおりの本舞い(掛かり)について簡単に紹介いたします。

● 十二とおりの舞い

○ 花 回 り (花掛かり)

三匹の親子獅子が富士山麓の牡丹畑にさしかかり、遊び戯れているうちに母親獅子がいけないことに気づき、大獅子と中獅子の兄弟が協力してさがす。

○ 大 弓

険しい山道で生い茂る大木や笹、つたを大弓にしたでそこを通り越えていく姿を舞ったもの。大獅子の、恐れ驚く女獅子をいたわる様子が表現される。

○ 小 弓

道中に魔物が脅かす。途方にくれた三匹の獅子に小弓が投げられた。この弓で魔物を射止めるべく、大獅子が弓をとりそれを退治して先に進む。

○ 太 刀

風雨が吹き荒れ道中を困難にしていた。そこで太刀を見つけ大獅子がこれを手にして四方を斬り込む。正面で魔物を討ち果たし、暗雲晴れて先に進む。

○ 門 (かんぬき)

参拝の道中には山あり谷あり森ありである。門は草木の生い茂る、ところを避て表現している。女獅子は迷い、大獅子に助けられ障害物からのがれる。

○ 屏 風 返 し (屏風隠し)

母親獅子がいけない。どうしたことかかと兄弟獅子がさがすが、いやがて弟獅子がみつけ兄獅子に知らせにいくうちに母親獅子がまた迷い込む。牡丹畑を別々にさがすうちみつけた弟獅子の、子と母の甘える姿、兄弟愛を舞う。

○ 橋

橋掛かりは、険しい谷間を流れる急流にかかっている一つの丸木橋を渡る舞で、どうして渡ろうかと母子が相談。勇気を出して大獅子から渡りきる。

○ 網

道中の障害物を網に見立てる。中獅子と女獅子がいけないことに気づいた大獅子はあわてぶため、網は引きちぎれず最後は歯で断ち切って親子が会う。

○ 鳥 視 き (からすのぞき)

道中の谷間を結ぶ一本の吊り橋に出会う。ゆれ動く吊り橋のゆえ、鳥のように軽やかに鳥が歩く時の姿で舞うのが特徴である。

○ 飛 び 恰 好 (とびかつこう)

富士参拝の険しい道を進んでいくと目的地が見えてきた。それ、あそこだと大獅子に促され中獅子、女獅子が大いに喜び勇んで行くしぐさを表現している。一説には、その喜びをくつろいだ気分て遊び、戯れている所作とも。

○ 繰 り 恰 好 (かえりかつこう)

繰る(ひるがえる)ことを古訓でカエリ(繰)と読む。母子が顔を寄せあつておこな参拝をすませた親子の苦勞をねぎらい合う姿である。

○ 御 幣 (ごへい)

無事に富士参拝を終えた三匹の獅子が神社から御札を頂戴し、喜びを分かちあう姿を舞う。このような意味からかつては舞のあと御札を観客に与えた。